

シラバス（様式）

授業科目名： 現代東アジア特論（ロシア）	選択/必修： 選択	単位数： 2	semester： 1 後	担当教員名： 袴田茂樹
<p>○授業の到達目標及びテーマ</p> <p>到達目標： 地域問題に関して、リアルな現実認識や現地感覚を基にして、きちんとした方法論によって研究対象を分析し、国際的に通用する、オリジナリティのある識見を構築することを目標とする。</p> <p>テーマ： ロシアおよび中央ユーラシア地域に関する政治、経済、社会、歴史、文化の総合的研究。現代ロシアの政治、外交、日露関係、また新潟県と関係の深いロシア極東の経済、社会の分析も重視する。</p>				
<p>○授業の概要</p> <p>ロシア及びそれと関係の深い中央ユーラシア地域に関して、政治（含外交）、経済、社会、歴史、文化などの視点から総合的な分析や考察を行う科目である。政治や経済も、単に政治学、経済学の視点からだけではなく、リアルな現地認識を前提とする社会心理的な側面も重視して分析する。</p> <p>ロシアの政治、経済に関して、一般的な制度、過程、政策を紹介、分析する。これは、ロシアの国家レベルでのことを中心としつつも、地方や国民のレベル、さらには社会や社会心理の面にまでおいて検討するという方式をとる。</p> <p>またかつてはソ連の一部でソ連邦崩壊後の現在もロシアと密接な関係のある国々（ウクライナ、バルト、コーカサス、中央アジア諸国等）に関しても、ロシアとの関係を主体としながらも、それぞれの国の政治、経済、社会、歴史、文化にも目配りをする。</p> <p>そして、ロシアの政治や経済、歴史が東アジアとの関係において、どのような位置を占めるかを考察し、さらには現代のロシアの対東アジア外交を検討する。</p>				
<p>○授業計画</p> <p>第1回 オリエンテーション、ロシア総論 授業を受けるにあたってのオリエンテーションを行った後、総論として、ロシアの歴史を総合的な観点からどう位置付けるか、世界史認識の全体的な枠組みにおけるロシア史の位置付けを考察する。</p> <p>第2回 ロシア史特論</p> <p>第1回に総論として概観したテーマを、帝政ロシアの特色、ソ連体制の特色など幾つかの具体的な事例、事象をケース・スタディとして取り上げて、さらに掘り下げる。</p> <p>第3回 ロシア政治総論、社会主義論 政治論の観点からロシアの歴史と現代を考察する。具体的には、帝政ロシア以前、ロマノフ</p>				

王朝、ソ連体制（社会主義体制）、現代ロシアの政治（プーチン政治論）を検討する。

第4回 ロシア政治特論、ソ連邦崩壊論

第3回のテーマを、古代ルーシ、タタールの軛、ロシア帝政、ロシア革命とスターリン主義、プーチン政治など具体的事例をもとに掘り下げる。ソ連邦崩壊の背景も分析する。

第5回 ロシア社会総論、「砂社会」論 社会論の観点からロシアの歴史と現代を考察する。ロシアの社会的特質として、担当者の概念である「砂社会」論の歴史的背景と現状を検討する。

第6回 ロシア社会特論、他の社会との比較研究

「砂社会」の特色を、具体的に日本社会、欧米社会、中近東社会、中国社会などと比較しながら掘り下げて考察する。

第7回 ロシア経済総論、「バザール経済」論 経済論の観点から、いわゆる「バザール経済」の傾向が強く、本来の市場経済が成立しにく

いロシア経済の特性を、社会心理的な側面を中心に考察する。

第8回 ロシア経済特論、低信頼社会論

「バザール経済」の問題を、歴史的には封建体制の欠如、契約観念の未発達、低信頼社会などの視点から、日本や欧米と比較しながら検討する。

第9回 ロシア文化総論 ロシア文化の特色について、総合的、歴史的な観点から考察する。

第10回 ロシア文化特論

第9回のテーマを、ロシア文化の黄金時代、銀の時代、ソ連時代、反体制知識人と芸術、現代ロシアにおける文化などについて具体的に検討する。

第11回 対外政策論、旧ソ連諸国との関係

現代ロシアの対外政策に関して、バルト諸国や CIS（独立国家共同体）など旧ソ連諸国との関係を中心に考察する。

第12回 対外政策論、欧米諸国、G7との関係 現代ロシアの対外政策に関して、G7を中心とする欧米諸国との関係を中心に、対立と融和の歴史、現在の状況を検討する。

第13回 対外政策論 発展途上国との関係

現代ロシアの対外政策に関して、中近東や東南アジア、途上国などとの関係を中心に考察する。

第14回 中露関係論 現代ロシアの対外政策に関して、中国との関係を中心に、戦略的パートナーシップと相互不信の関係などを検討する。

第15回 日露関係論 現代ロシアの対外政策を、対日政策を中心に過去、現代、今後の展望などを考察する。経済関係や北方領土問題などについて、詳しく検討する。

○テキスト

現場感覚を把握するために、主としてロシアの文献、雑誌、新聞を中心に、テーマに即した最新の資料を、日本語に翻訳して毎回配布する。ロシア語が読める者には、ロシア語の原文も配布する。

○参考書・参考資料等

授業中、各界のテーマに応じて適宜最新のもの、また古典などを紹介する。

○学生に対する評価 授業中の発表や討論および課題のレポートを評価の対象とする。評価基準は、担当教員の見解、立場との異同は問題にせず、各回のテーマに関してどれだけ深く分析、考察して独自の見解を構築しているかを重視する。